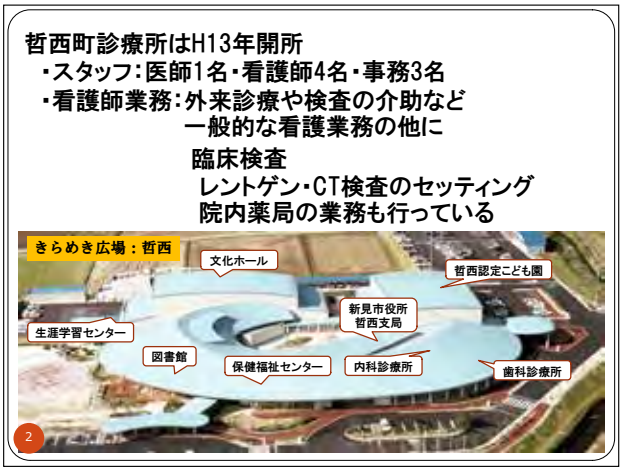
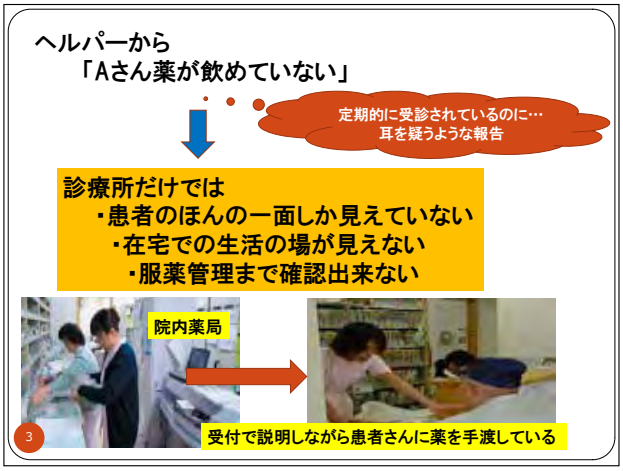
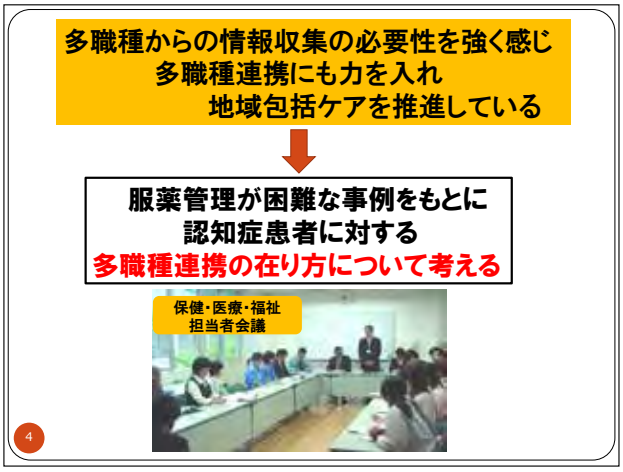
演題 123	認知症患者の薬の管理 “薬がのめていない”というヘルパーの一言から始まった多職種連携
	発表者　高瀬　佳子（岡山県　哲西町診療所）
	共同研究者　桑原　ひとみ、安陪　こず恵、太田　雅恵、高尾　順圭、村瀬　奈美、河村　智子、佐藤　勝



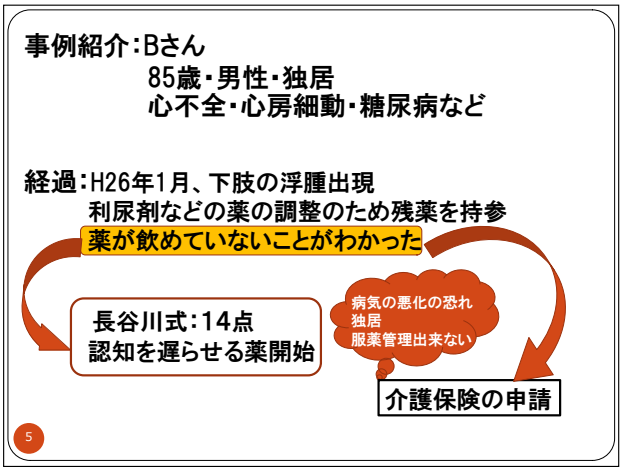
哲西町診療所はH13年開所し現在、スタッフは医師１名、看護師４名、事務３名である。看護師は外来診療や検査の介助など一般的な看護業務の他に臨床検査やレントゲン・CT検査のセッティング、院内薬局の業務も行っている。



開所当時、ヘルパーから「Aさんが薬が飲めていない」と聞き、定期的に受診されているのにと耳を疑うような報告であった。診療所だけでは患者のほんの一面しか見えず、在宅での生活の場が見えないことから、服薬管理まで確認出来ていないことに気づいた。

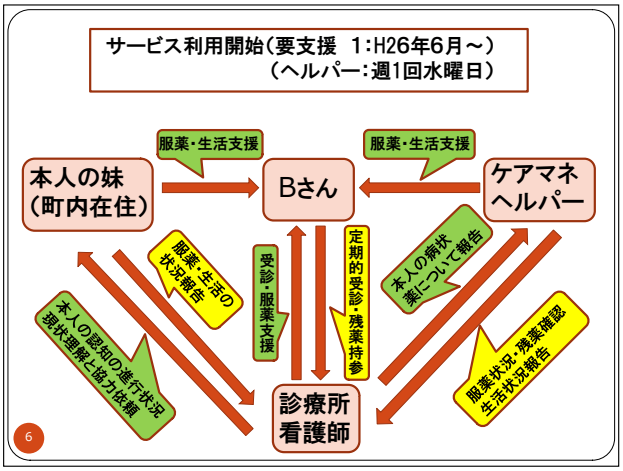


そのため多職種からの情報収集の必要性を強く感じ、当診療所では多職種連携にも力を入れ地域包括ケアを推進している。その中で今回は、服薬管理が困難な事例をもとに認知症患者に対する多職種連携の在り方を考える。

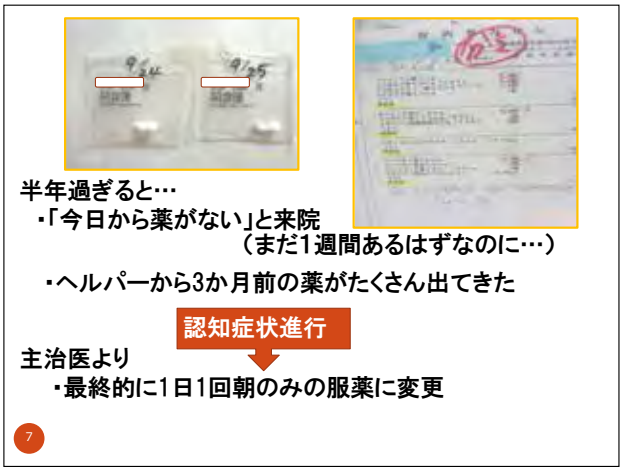


実際の事例を紹介するＢさん：85歳・男性・独居。心不全、心房細動、糖尿病あり。H26年１月、下肢の浮腫がみられ、利尿剤などの薬の調整のため残薬を持参してもらった際、用法も間違っており、飲み忘れも多いことが分かった。

認知症を疑い長谷川式簡易知能評価検査を行うと14点であったため、認知を遅らせる薬が始まった。しかし、服薬がきちんと出来なくなることで病気の悪化の恐れがあり、さらに独居のため、服薬確認をする術もないことから、介護保険の申請を勧めた。

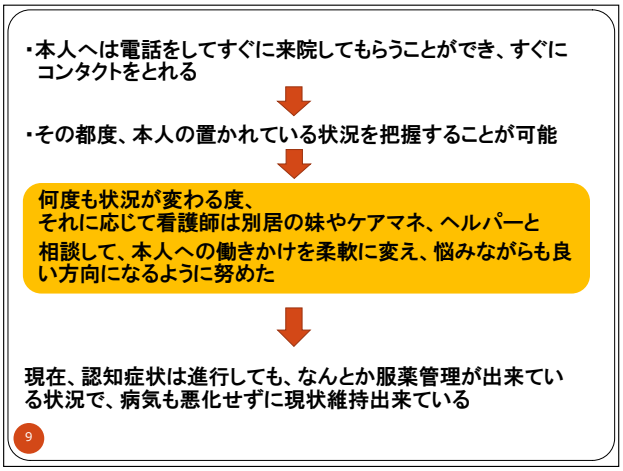


介護認定を受けサービス利用が始まると、ケアマネやヘルパーに服薬状況や残薬確認をお願いし、看護師の方からその都度、本人の状況や薬の変更など連絡した。さらに看護師の方から、別居の妹さんへも本人の認知症状が進んでいる状況を話し、理解を得て服薬や生活状況を気にかけてもらうようにお願いした。

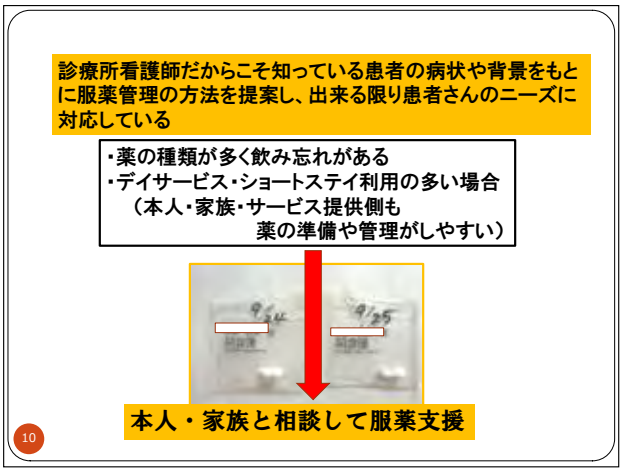


診療所では、処方した薬には分包し月日を記入し次回受診日もひかえていた。しかし半年も過ぎると、まだ１週間薬があるはずなのに「今日から薬がない」と言われ、本人来院。ヘルパーからは３ヵ月前の薬がたくさん出てきたとの報告もあった。長谷川式の点数は18～20点と低下はないが認知症状は明らかに進行しており、飲み忘れが少なくなるように主治医より最終的には１日１回朝のみの服薬に変更となった。

以前より使用していた薬箱からカレンダーに貼り付ける方法に変更しようとしても本人は薬箱の存在すら忘れて「そんなもんは知らん。そこまでボケとらん」と言われ対応に苦慮した。



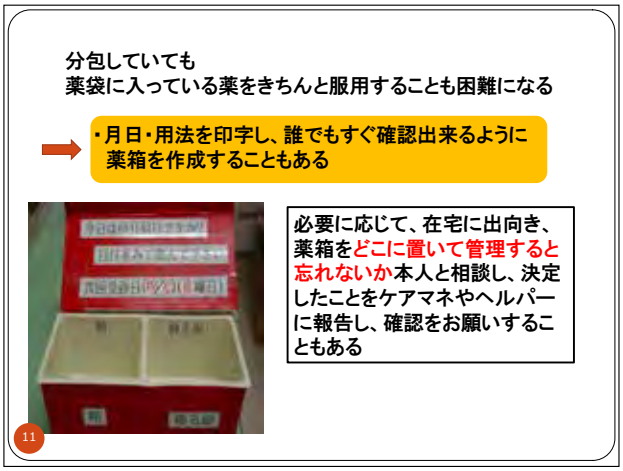
しかし、本人へは電話をしてすぐに来院してもらうことが出来、すぐにコンタクトが取れるので、その都度、置かれている状況を把握することが出来ていた。さらに、多職種だけでなく町内の親しく交流のある方たちの情報提供もあり、何度も状況が変わる度、それに応じて看護師は別居の妹やケアマネ、ヘルパーと相談して、本人への働きかけを柔軟に変え、悩みながらも良い方向になるように努めた。現在、認知症状は進行してもなんとか服薬管理が出来ている状況であり、病状も悪化することなく、現状維持出来ている。



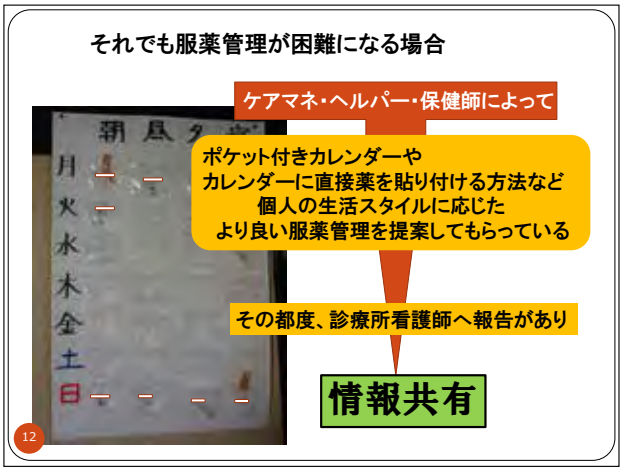
診療所看護師だからこそ知っている患者の病状や背景をもとに、服薬管理の方法を提案し、出来る限り患者のニーズに対応している。

薬の種類が多く飲み忘れがあると分かれば、まず、本人と相談して分包をしている。

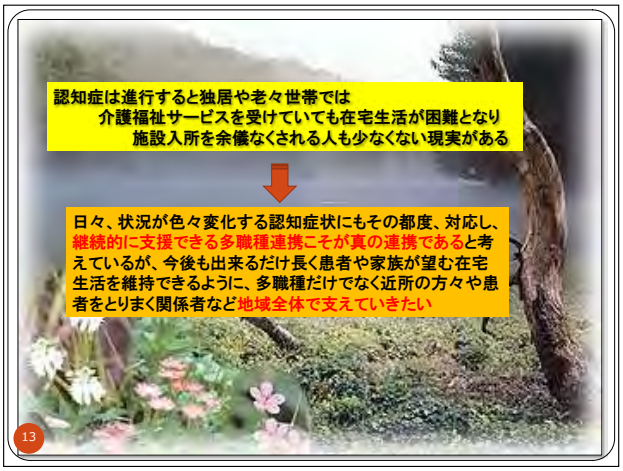
また、デイサービス・ショートステイ利用の多い場合は、本人や家族、そしてサービス提供側も薬の準備や管理がしやすいよう、相談して服薬の支援をしている。



しかし分包していても薬袋に入っている薬をきちんと服薬することも困難になる場合がある。その際は月日・用法を印字し、誰でもすぐに確認出来るよう、薬箱を作成することもある。必要があれば在宅に出向き、薬箱をどこにおいて管理すると忘れないか本人と相談し、決定したことをケアマネやヘルパーに報告し確認をお願いすることもある。



それでも服薬管理が困難になる場合は、ケアマネやヘルパーや保健師によって、ポケット付カレンダーやカレンダーに直接薬を貼り付ける方法など個人の生活スタイルに応じたより良い服薬管理を提案してもらっている。そしてその都度、診療所看護師への報告があり、情報を共有している。



開所当初より通院している患者の中にも、年を重ねるごとに徐々に認知症が発症し独居や老々世帯では介護福祉サービスを受けていても在宅生活が困難となり施設入所を余儀なくされる人も少なくない現実がある。日々、状況が色々変化する認知症状にもその都度、対応し、継続的に支援できる多職種連携こそが真の連携であると考えているが今後も出来るだけ長く患者や家族が望む在宅生活を維持できるように、多職種だけでなく近所の方々や患者をとりまく関係者など地域全体で支えていきたい。